

WALL DECOR JOURNAL

家族の思い出を形に残していく





WALL DECOR

“時を飾る” 思い出をいつもそばに。

What's WALL DECOR?

「お気に入りの写真」+「パネル加工(額装)」=
壁に飾る新しいサービスです。

「WALL DECOR」は、ご自宅のパソコンからインターネットを通じて注文用サイト上で、仕上がりサイズ、面種とフレーム素材を選ぶだけで簡単にお気に入りの写真を使ったパネルや額縁を注文できる富士フィルムのプリントサービスです。

種類は5つ

部屋の雰囲気に合わせてお好みのデザインを選べるよう、パネルや額縁のデザインや面種のラインアップを豊富に揃えました。

サイズも豊富

サイズは1辺が30cm前後の「ましかく」からA3相当サイズまで、インテリアとして扱いやすい大きさを揃えております。

詳しい情報は
「富士フィルム ウォールデコ」で検索

Interview 1

家族の思い出を形に残していく

家族、旅、何気ない日常生活の写真など、飾られる思い出は人それぞれです。今回は、お子さんや愛猫との思い出を写真に残すことについて、編集者の山口博之さんとミュージシャンの坂本美雨さん夫妻に WALL DECOR を実際に使っていただき、ご自宅にお邪魔してお話を伺いました。

新しい家族との出会い

——普段から写真を撮る機会は多いですか？

美雨(以下M): すごい量を撮りますね。私が撮るのは娘とサバ美(愛猫の名前)ばかりですが(笑)。

山口(以下Y): 昔からサバ美ばかり撮っていたのに、さらに娘が増えて。

M: サバ美が来る前は、風景やご飯を撮っていましたが、サバ美が来てから撮る量は断然増えましたね。携帯の画質も良くなりましたし、ふたりとも SNS をやっているのもあります。

Y: 妻は面倒臭がりだから、あまりカメラを出してマメに撮るタイプでもないし、だからスマホのカメラの画質向上はかなり影響があると思います。

M: 猫なんかは特にその瞬間を撮りたいことが多く、カメラを首から下げてない制限間に合わないので、9割がスマホです。子供が生まれてさらに動画が増えたので、容量が足りません(笑)。

Y: 僕は昔から写真が好きで撮っていましたが、母方の実家が写真館なので、写真はずっと身近なものです。撮られるのはずっと苦手ですけど……。職業柄、写真家さんに仕事をお願いすることもあり、今も写真に関わる時間は長いです。

——今回選んだ写真について、お話を聞かせてください。

Y: 日常の写真は頻繁に SNS でアップしているので選ぶのが難しく、今回はこの数年で一番大きな出来事だった3枚を選びました。この2枚(P.06下)はセットのつもりで、初めて娘が家に来た時、部屋の真中にいた僕を挟んで、寝ている娘と反対側から子どもを見つめるサバ美を撮影したものです。なんだかわからないものを見ているサバ美と、カゴに入った生まれたばかりの娘。新しい家族を迎えた時の出会いのシーンとして記憶に残っています。もう一枚の写真(表紙)は、その直後にサバ美が娘と初めて対面した瞬間のものです。

M: 一週間で飼い主の私がいなくなることは猫にとってストレスな状況です。さらに私が知らない生き物を家に連れて帰ってくるのは、すごくショックなことなんだと友人から聞いて、娘とサバ美の初対面をどうしようという話になり、夫が赤ちゃんを部屋





に連れて帰り、私はまずサバ美のところへ行って敬意を示すことにしました。カゴを置いた後に一旦ドアを開めたのですが、向こうの部屋から「あれ？何かいる？」という感じでサバ美は娘のことを見ていましたね。

写真を飾る文化

—家中で写真を飾ることは、昔からありましたか？

Y: 妻はニューヨークに住んでいたのもあり、家中で写真を飾る文化がありました。僕の場合は、父親が誕生日やクリスマス、年末など行事ごとに家族写真を撮るのを恒例にしていますが、それは飾るものではなく記録として撮っておくものでした。なので、結婚してからは新鮮ですね。アート作品としての写真も欲しいと思いますが、今の家だと飾れる壁が少なく、鑑賞できる環境がまだ作れていないです。でも、イラストを飾ったり、額装自体はよくやっています。

M: きちんと額装してくれると、こちらとしてはありがたいです。お母さんたちもみんな本当はそうしたいけど、どうしたらいいかわからない人も実際多い気がします。なので、そんな方にとって WALL DECOR はありがたいサービスだと思います。

—美雨さんは、昔から写真を飾ることが自然な環境で育ってきたと思いますが、家族写真を飾ることについてどう思われていましたか？ また、思入れがある写真はありますか？



M: 家族写真を飾ることは、当たり前というか、こういうものだ、という風に自然に思っていました。でも、十代の頃はやっぱり自分の写真は嫌いでした。思入れがあるのは、鋤田(正義)さんが撮ってくれた、父(坂本龍一)が私をハグしてくれているポートレートです。ワールドハピネスという夏フェスで撮ってもらったのですが、二人とも素の表情をしていて、貴重な瞬間でした。ずっと大事にしたいと思います。

—子供や愛猫との思い出を形に残すことには、どんな意味がありますか？

M: わたしは過ぎ去ってしまうことをすごく怖れるところがあり、ものすごく忘れっぽい部分もあるので、自分が大事だと思ったことや大切な瞬間を忘れちゃうんじゃないかと必要以上に心配して、つい撮りすぎてしまいます。娘やサバ美のことを一瞬も逃したくないという気持ちです。母になったことで、その気持ちにますます拍車がかかっています。

気軽に作れる便利さ

—実際に使ってみて、いかがでしたか？

Y: 金額も高くないですし、写真の発色が想像よりキレイでクオリティもとてもいいと思いました。

M: フォトスタジオに行っても記念写真を撮るのも記念になりますが、普段の方がすごいいい顔をしていて、なにげない一瞬を切り取った写真を飾りたい人もいると思うので、それをこのクオリティにしてくれるのは、ママ需要があると思います。

Y: 父が執拗に家族写真を撮っていたように、家族写真は大人になってから良さがわかりますよね。たまに撮っておいてよかったという気持ちが思い出されるようなものとして、残しておくのは大事です。

M: そうすることで、こういった習慣が受け継がれますよね。

藤堂(富士フィルム): 「アルバム」についてお母さんたちにインタビューをしてみると、50%のお母さんがきちんと「アルバム」にしているようです。やってない方に聞いてみると、気持ちはあるけど、忙しいし、

手間もかかって作るまでが大変、でもしないといけない気持ちはあるみたいで、「ごめんさい」と言われます。カタチに残すことを必要とってくれている事からも、当社がこのサービスをやる使命はあると強く感じます。

—こんなサービスがあったらいいな、と思うことはありますか？

Y: 写真を入れ替えなくなった時、子どもの写真を捨てるのは忍びないので、額を取り外して写真を入れ替えることができるとスマートに保管できていいですね。あと、若いカメラマンがこのサービスを使って展覧会をやるようになってくると、また面白くなると思います。

山口博之(やまぐち・ひろゆき)

ブックディレクター/編集者。1981年仙台市生まれ。BACHを経て昨年独立。本屋さんやライブラリーなどをつくっています。

坂本美雨(さかもと・みう)

ミュージシャン。1980年生まれ。東京とNYで育ち、97年歌手デビュー。音楽活動に加え、ラジオパーソナリティー、執筆なども行う。



Example

1. インテリアショップ勤務 泉哲雄邸
2. セレクトショップ「organ」 武末充敏邸
3. ランドスケーププロダクツ邸
4. ファッションデザイナー 藤戸剛邸
5. 音楽会社勤務 M 邸
6. プロデューサー / ミュージシャン 坂口修一郎 鹿児島オフィス

一枚の写真には、それぞれの人のストーリーが込められています。また、一言で“写真を飾る”といっても、自宅やオフィスなど、場所やシチュエーションによって、その見え方は様々に変わってくるのではないのでしょうか。そこもまた、写真が持つ魅力だと思います。ここでは、様々な活動をされている方々に WALL DECOR を実際に使っていただきました。ここに登場するのはどんな人たちのか、想像してみましょう。



